

内村鑑三（一八六一—一九三〇）は、日本近代史上の「代表的キリスト者」と言つてよい。何より龐大な内村研究の蓄積がそれを物語っている（品川力編『内村鑑三研究文献目録 増補版』一九七七年十二月・荒竹出版、藤田豊編鈴木範久監修『内村鑑三著作・研究目録』二〇〇三年六月・教文館）。本論文は、第一に長く内村研究において重要な論題であり続けてきたキリスト教信仰と「ナシヨナリズム」の問題、第二に内村伝における〈転機〉として記述されてきた信仰体験の再検討、第三に内村と詩歌の関わりという視座から、内村におけるテキストの引用と〈読み替え〉の検討、および内村が読んだテキストに残されている〈書入れ〉の分析という二つの方法により、出来得るかぎり内村の信仰体験および思想的営為の〈現場〉に身を置き、内村の実像と世界像に内在的に迫ることを目指したものである。

内村におけるキリスト教信仰と伝統思想の関わりを問うことは、内村において Jesus と Japan すなわち〈二つのJ〉の相剋とはいかなるものであったのかを問うということに他ならない。本論文の各章では、その具体相を検討するために、「正気歌」・『報徳記』・『古今集遠鏡』・『先哲像伝』を取り上げたが、いずれも当時一般に教養として親しまれていたものであつて、必ずしも内村に特殊なものとはいえない。内村の〈特殊〉性は、素読・朗唱によりそれらの伝統思想や世界像を自らの身に引き受けた「日本武士」（内村最晩年の自称）としての自覚の深さにある。「第二の回心」を経験して「基督愛国」の信念とともに帰国した内村にとって、「不敬事件」は、いわば Jesus によつて自らの内なる Japan が徹底的に審判され廃棄された経験であつた。その廃棄体験の深刻さは、そのまま内村の内なる〈正気〉＝伝統思想の根の深さを示すものであり、それゆえに「不敬事件」による〈故郷喪失〉の衝撃は一層深刻で、内村にとつてまさに内的な〈死〉に等しい経験であつたといつてよい。それはいわば、〈正気〉によつて構成された「日本」と自己像を含む「正気歌」的な世界像の破綻を意味した。だからこそ、その後にもたらされた〈再起〉は、内村にとつてまさに奇跡＝〈復活〉以外の何ものでもなかつた。一度は一切を失つた自己に、全「宇宙」が回復せられた、と内村は言う。「国人に捨てられ」た内村は今や「宇宙の人」となり、「宇宙の教会に入会」した。もはや「日本人」や「教会人」であるより以前に「宇宙人」であることが、内村の根源的な自己規定となつたのである。「日本」も「教会」も、この新たに視界に現われ始めた世界像——大いなる「宇宙」の一部として位置づけられることになつた。

「ロマ書」第八章の「講義」において、内村が、人類と天然がともに罪と悪の世界で終末の日を望み見て苦しむつつ待つさまを「うめく宇宙」と表現したとき、その「うめき」を「生みの苦しみのうめき」として聴き取ることができたのは、自身が繰り返しうめき、廃棄される経験を嘗めながらも、その都度再起せしめられてきた内村にして初めて為し得たことだつたといえよう。〈二つのJ〉を愛するという内村生涯の指標は、かような内村自身の「うめき」と再生、および全宇宙の「うめき」と完成を背景として理解されるべきであらう。「日本」も、そこにある「教会」も「無教会」も、共に完成の日を待ち望む「うめく宇宙」の中にある——。札幌農学校でキリスト教に入信し、万物を創造し支配する唯一の神を信ずる信仰を告白した内村の内面において、「不敬事件」をはじめとするその後の人生の曲折と信仰の体験を重ねる中で形成された、神の創造と保持により自然と人類の歴史のすべてを包み込みながら「うめき」つつ成長発展し遂には完成にいたる、生ける「宇宙」の実在と、その希望に基づいて現実世界に働きかけていく自己を含む世界像は、内村がその生涯を通して到達した〈告白〉として、看過できない意味を持つ。内村が聴き取った「宇宙のうめき」が世界的な戦雲の拡大とともに明らかかな現実となつていった時代の「うめき」の中で、終末における「宇宙の完成」の希望に生きるキリスト者として、あるいは信仰共同体として、如何に生き、戦うかという重い課題が、内村の死後、「無教会」の担い手たる南原繁・矢内原忠雄ら弟子たちに引き継がれていくこととなつたからである。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	今高 義也
論文審査担当者	(主査)教授 片岡龍 教授 高橋章則 准教授 引野亨輔
論文名	内村鑑三の世界像 伝統・信仰・詩歌
<p>本論文は、内村鑑三におけるキリスト教信仰と「伝統」思想との関り(二つのJ)という内村研究の王道的視座に、これまでほとんど顧みられなかった内村による東西の文学的テキストの〈読み替え〉〈書き入れ〉という新たな観点を導入することで、内村の思想的生涯の実像とその独特の世界像とを浮かび上がらせようとしたものである。</p> <p>本論文は、研究史・視座・方法を簡潔に述べた序章につづき、本論にあたる第一～八章、補論にあたる、内村の「再臨運動」が南原繁に与えた影響を論じた第九章と、円熟期の内村の人間像を伝える聞き書き史料を解題・抄録した第十章(九・十章は内村「後期」の片影を間接的に浮かび上がらせる)、最後に全体を「うめく宇宙」と〈二つのJ〉というキーワードを中心に総括した終章から成る。</p> <p>第一～十章は、ほぼ内村の生涯を辿る形で構成されている。内村の生涯は、「初期」(出生から不敬事件前後まで)、「前期」(窮迫時代から『東京独立雑誌』廃刊まで)、「中期」(『聖書の研究』創刊から無教会の形成期まで)、「後期」(再臨運動から召天まで)に分けられ、さらにそれらは、〈宇宙に結ぶ個我〉としての再生から「無教会」キリスト教思想へといたる前半期(初期、前期、中期)と、さらにそれが現実世界における〈万物の復興〉＝「宇宙の完成」という再臨信仰へと展開する後半期(後期)とに大分される。本論文が、内村に即して本格的に論じるのは、その前半期である。</p> <p>前半期中核になるのは、不敬事件(1891年)の衝撃と「楽園の回復」(1892年夏)である。不敬事件が〈故郷喪失〉といえるほど衝撃であったのは、それだけ内村にとって伝統思想(水戸学的「正気」＝愛国の情念・天皇への崇敬)の根が深かったことを示し、そこからの〈宇宙に結ぶ個我〉としての再生(「楽園の回復」)が、そのまま「日本」「天皇(神格化)」「教会」の宇宙的世界像からの捉えなおしへと連結する(第一～四章)。第五～八章は、内村文庫所蔵の旧蔵『古今集遠鏡』・『先哲像伝』・<i>The Death of Christ</i>への書き入れや、ワーズワース詩の読み替え(『報徳記』読み替えは第四章)の分析によって、内村の宇宙的世界像やその展開に、多様な角度から光を当てている。</p> <p>本論文は、従来の内村研究においてほとんど利用されてこなかった諸史料の調査とそれらの精密なテキスト分析、また内村関連の史蹟の踏査と一次資料へのこだわり(「楽園の回復」の時期・場所の特定へとつながる)など確固たる基礎研究の上に、内村の思想形成の中核となる独特の宇宙的世界像の成立過程を明らかにし、内村におけるキリスト教信仰と伝統思想という古典的な研究課題にたいして、清新な解釈の地平を開くことに成功している。後半期にたいする本格的分析の不足、分析概念(「伝統」など)のいっそうの洗練、内面史に注意が偏ることによる、内村の「物理」重視や「地上」性の側面、またテキストそのものもつ多層性などへの目配りの不備など、今後の研鑽の余地を残すところもあるが、本論文の成果が斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑問の余地がない。よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	